

甘いドーナツと人魚

登場人物

男

女

老女

ところ

水族館の調餌室（エサの準備をする部屋）

作業服に長靴の職員らしき若い男が、流しで黙々と魚を切り分けている。

少し離れた作業台に腰かけているのは、髪の長い若い女。

男とお揃いではあるがサイズの合っていない作業服を着て、裸足の両足を元
気よく振りながら、楽し気に喋り続けている。

女 でもね、夜の暗闇の中でも、彼の周りだけは光り輝いて見えるのよ、あんまりにも美しすぎるせいで！ 釣り竿をこうシュツと投げる姿なんかも異様にカッコいいわけ。玄人も裸足で逃げ出しそうな完璧なフォームなの。なのに！ なのによ？ 釣れないんだこれが！ 毎回毎回一匹たりとも！ これがまた！ 見掛け倒しのギャップがたまらん！ ……え、ちよつと待って。それってひよつとして優しさ？ 小アジ一匹殺せない慈悲深さの表れ？ だけど夜釣りは楽しみたいという心の葛藤が生み出した独自のスタイル？ うそ、天才。顔と家柄にとどまらず、頭もよくて優しいってなにそれちよつと最高なんだけど！

男 (手を休めず) ……すごいね。

女 だよねー。あなたたちも誇らしいでしょう。自分とこの王子様があんなに素敵な人で。

男 ……すっごい喋るね。

女 あ、邪魔しちゃった？ ……そう言えばさつきからなにやってんの？

男 エサの準備だよ。営業はしてなかったって、魚たちに食べさせないわけにはいかないからね。

女 それはそれはご苦労様です！ 魚たちに代わってサンキューベリーマッチです！

男 (切身を一つ差し出し) 食べる？

女 ノーサンキューです！ でもお気遣いありがとう。

男 いや、食べたら少し黙るかなって。

女 分かち合いたいのよー。王子様の素晴らしさを誰かとともに！

そこへ、シヨールをぐるぐる巻きにして目だけ出した老女が入ってくる。

老女 ちょっとー、またバスの本数減らされてんじゃないよ。ああ、歩いた歩いた。ほら、差し入れ持ってきてやったよ。相変わらずこもりつきりでろくに食べちゃいないだろ？

男 (買い物袋を受け取り) いつも悪いなあ。

老女 買い物に出たついでだからさ。

男 でも見つかったら罰金でしょ？

老女 (ため息) まったくおかしな世の中になっちゃったよ。…… (女に気づき) 誰？

女 元・人魚です！ こうして人間の仲間入りが出来てうれしいです！ 仲良くしてね？

老女 ……人魚？

女 はい！ 愛しの王子様を追いかけて、海から這い上がってきました！

老女 (怪訝そうに男に) ……また？

女 え、なになに？ 「また」って。

男 今度のは、恐ろしく喋る……。

女 あたしが初めてじゃないってこと？ なるほど！ それで二人ともこんなになりアクション薄いわけね？ いや、納得納得。話が早くて助かるわー。

男 …… (老女に) な？

老女 ……前のは口がきけなかったのに。

女 ああ、海の魔女の言いなりになっちゃったんだ、その先輩は。言われんのよ。「人間の姿にしてやる代わりに、おまえのその声をもらおうよ」って。けどさ、(自分の足をたたきながら) この足！ イテテテ……。歩きたんびに針で刺されてるみたいに痛むんだからね？ 交換条件としてはこれでもう充分でしょ。充分過ぎるでしょ。アイタタタ。(とさすったり揉んだり)

老女 ユニフォーム着てるけど。

男 素っ裸のまま浜辺でのたうちまわってたから。

老女 ……外出禁止令出ててよかったねえ。

女 こんな痛い思いしてまで人間になったのに、喋れないとかあり得ないんで！

老女 いや、よくないわ。…懲りないね、あんたも。

男 この職員としては、海で生き物が困つてるとどうしても…。

女 ま、あたしの場合はね、最終的には暴力に訴えて、この美しい声を死守できま

したけど！（軽く歌う）

老女 ……微塵も困つてなさそうじゃないよ。

男 そうなんだよね。

女 おや？ エサづくりは終わったのかな？ そしたらちやちやつとお魚たちの食

事をすませて、早くあたしをお城に連れて行かなくちゃ。

男 そんな大仕事を休館中の水族館に放り込まないでほしいんだけど。

女 「乗り掛かった舟」という言葉があるでしょう！ あなたたちの世界には。

老女 外出禁止令が出てるって言ったろ？

女 誰よ！ そんな余計なもん出してんのは！

男 君の大好きな王子様だよ。

女 えくく。それじゃ暴力に訴えられないく。（と突っ伏す）

老女 え、なに？「愛しの王子様」って、本物の王子様のこと？

男 夜釣りに来なくなっちゃったから会いに来たんだって。

老女 なんだ。あたしはまたてつきり、あんたにイカれた人魚がもう一匹現れたの

かと思つ…

女 （ガバっと身を起こし）はあ!? ちょっと聞き捨てならないんですけど！

この程度の人間のために大事な尻尾を犠牲にするほど、あたしたち人魚はバカ

じゃないんで！

老女 残念ながらいたんだよ。この程度の人間にのぼせたバカなお仲間が。

女 ええ！ 信じられない！ あ！ さつき言つてた先輩か！ なんといいもの好

き。こんなの一体どこにそれほどの価値と魅力が…あ、ごめん。傷ついた？

男 傷つくヒマがないほど急なとばっちりだったから大丈夫。

老女 人魚に限らず、この男はなんでだか昔っからよくモテてさ。

女 へー意外ー。

老女 それでちよつと言い寄られると、ふわあつとその気になっちゃって、つきあっちゃあすぐ別れての繰り返し。

女 えー最低ー。

老女 誰かどくつついてなきや生きてらんないくせに、一人の決まった人といると、段々無力化して次にうつっちゃうもんだから、当時のあだ名「ウイルス」だったよね？

男 ……なんか徐々に心がえぐられだしたかも……。

女 で？ その先輩、結局どうなったの？

老女 ……。

男 ……。

女 ……この重たい空気から察するに……死んだ？

老女 ……死んだっていうのかね、あれは。

男 ……消えちゃったんだよ。きれいな泡になって。

女 そういうお約束だからね。思う相手にフラれるか、なんかしらのタブーを冒せば、この身体は泡となってさようなら。でも氣い遣わないで？ こちとらそれも覚悟の上の上陸なんで。

老女 うらやましいくらいに潔さだ。

男 人魚ってバレるのはタブーじゃないんだね。

女 ていうかウイルスのくせになんで先輩のことフツたのよ。

男 特にフツた覚えはないんだけど……。

女 ……ん？ ということは……。

男 あの頃は、恋愛どころじゃなかったし……。

老女 いま流行^{はや}ってるのなんかよりもずっと恐ろしい伝染病が蔓延してたんだよ。

この水族館の職員だって、あたたしたち二人の他は、みんなあの世に連れてかれちゃった。

女 ……ねえ。ウイルスっていま年いくつ？

男 ほんとやめてその呼び方。ご時世的にも。

女 いくつ？

男 ……。

女 ……なんか匂うけど、ま、いいや。それよりなに？ 病気流行ってるの？ いま。

老女 あんたたちと関係あるんじゃないのかい？ 人魚が陸に上がってくると、疫病が流行るとか。

女 とんだ言いがかりです。根拠のないこじつけを気軽につぶやかないでください。で？ 王子様は無事なんでしょうね？

男 今のところはね。ただ王室は大変だよ。お父上の国王様と大方の大臣たちはみんな入院しちゃったし。

女 やだ、一人で頑張ってるんだ。健気。そりゃあ釣りどころじゃないわー。

老女 いっそのこと、一日中釣りでもしててくれたほうが、本人のためにも国民のためにもなるだろうに。

女 あ！ 今のはお為ごかしの悪意あるつぶやきですね！

老女 あの王子様が一番最初にやったことなんだと思う。全国民に野菜ジュースを二本ずつ配ったんだよ？

男 ああ、それまだうちには届いてないなあ。

女 え、ジュースとか発想がかわいい♡

老女 それもわざわざ丁寧にクール便で。

女 きゃあ、やさしく。気が利いてるう♪

男 でもクール便については「無駄遣いでした」って謝ってたじゃない。

女 やだ素直☆

老女 今朝の国営放送、見た？

男 いや。もう最近見ないようにしてんだよ。しどろもどろのスピーチが痛々しくして。

女 王子様がスピーチするの？ うそー！ なんてなんて？

老女 今日はね、「疫病退散を祈願するための寺院を建てる」って仰ってた。

女 なにそれ！ も〜最後は神頼みとかキュンとしちゃう！

男 ガツチリ囲まれちゃってんだろなあ。建設業界とかの悪い輩に。

老女 そんなのにまた湯水のように税金が使われてくのかと思うとげんなりだよ。

ああ、おやつも作ってきたから、気晴らしにちよつと食べない？（と作業台に包みを取り出す）

男 （包みを開いて）お、うまそー。

老女 おつと、手洗うの忘れてた。（と流しへ）

男 こんな作ってる余裕あるんだ？ 目が回るほど忙しいって言ってなかった？

老女 寝る間もないほど忙しいっての。ホームのスタッフも次々に感染してくもんだから、医療従事者なみに働いてるよ。こっちは魚の世話しかしたことないただの入居者だったのに。

男 （女に）君が夢見てる王子様の治める国は、いまこんな有様なんだよ。それでも辛うじて世の中が回ってるのは、彼女みたいな人たちがいるからだ。誰かがやらなきゃいけないことを、誰に命じられたわけでもなく、ずっと引き受け続けている。褒められもせず、泣きもせずね。

女 ……鈍感そうにみせかけて、そういうことをポエムっぽくささやいたりするところが、あなたのモテポイントなのかもね。

男 え、ポエムっぽかった？ なんか恥ずかしいな。

女 狙ってないんだ？ タチが悪いね。

老女 （戻ってきて）あんたもよかったらお食べ。甘い揚げ物とか大丈夫？ このお菓子はね……

女 （やや投げやりに）知ってる。「ドーナツ」でしょ？「この穴を発明したのは俺なんだ」って、前に難破しかけてた船の船長が自慢してた。

男 へえ、そうなんだー。いただきまーす。

女 ちよつと待ちなさいよ……。

老女 そうだよ。飲み物ないと厳しいよ？ ドーナツは。

男 じゃあコーヒーだね。あ、ミルク切らしてたかも……。

女 ドリンクのことで待ったをかけたわけじゃないんですけど。

男 ……どうした？ さっきまで黄色い声出してたのに。

女 恋する乙女のひいき目でごまかしてる場合じゃなさそうなんで。

老女 ようやく現実を受け入れたかね。

女 ……。王子様は伝染病の対策に失敗し続けてる。人はいいけど、おつむのほう
はあんまりよろしくないらしい。だから国民に馬鹿にされてる。さらに最新情報
によれば、一部の業界の食い物にされる寸前……。

男 うん、よくまとまってる。

老女 この子の賢さの半分でもあの王子様にあったらねえ。

女 のんきにドーナツ食べてる場合じゃないって言ってんの！ こんな海の底みた
いなどで愚痴ってる暇があったら、なにか行動を起こしなさいよ！ あんた
たちは過去に恐ろしい流行り病を生きのびてるんでしょ？ ならその経験を活
かして社会に役立てろっての。特にあんた！（と男を指さす）

男 ……はい？

女 めいっばい有効に活用してよ！ その不老不死の体を！

男 ……あれ、それまだ言ってるじゃなかったっけ……。

女 話の流れで大体読めたわよ。先輩の血だか肉だかを口にしてるよね？ それ、
人魚の世界で最大最悪のタブーだから。

老女 本人に黙ってあの子が勝手にやったことだよ。自分の命と引き換えてでも、
病気から守ってやりたかったんだろ。

女 （ため息）……だからダメなんだってば、自分の言葉を伝える声を魔女なんか
に差し出しちゃ。コミュニケーションは恋愛の命でしょ！ なにもかもが違って
る者同士、対話を重ねて次第に固く結びついてくのが醍醐味でしょ？ 至上の喜
びでしょうよ！

男 ……そんな喜びは知らないままできちゃったかもなあ。

女 くだらない反省は家で一人でやって！

老女 あたしたちになにをしろってのさ。

女 とにかく王子様の名誉挽回にご協力を。

老女 挽回するほどの名誉なんて、あの王子様にあつたかね。

男 ずっと愛されてはきたけどね。生まれた時から天使みたいにかわかったし。

女 (領き) そうでしょうでしょう。

男 欲もないし、ウソもつかないし。

女 本物の天使なのでは？

老女 そこがまた厄介なんだよ。見た目と性格が抜群にいいせいで、どんな愚策を繰り出しても、みんなせいぜい陰口をたたくだけ。引きずり降ろそうとまで嫌う人間は出てこない。

男 国王様には他に子どももないから、ほとんどあきらめムードなんだよねえ。

女 無限に時間のあるあんたがあきらめてどうすんの！

男 ……それ一番言われたくないヤツ……。

女 ほら、真面目に考えて！ ダダ下りの人気をV字回復させる方法を！ ……やっぱり王子様のからむ案件だけに、王道でいくとするならば……。

老女 あ、人魚の血でワクチン作るとか？

女 邪道の極みじゃん！ タブーだって言ったでしょ？ それやったら王子様との未来もあたしも水の泡だから！

男 同情を引くんでいいなら、心を鬼にしてクーデターを起こすとか……。

女 なんで二人ともそんな過激なの？ 王室を転覆なんかさせません！ 王子様は据え置きで！

老女 それじゃあなにひとつよくなんかならないよ。

女 まだ希望はある。幸いなことに、王子様は持つてるから。上に立つ者に求められる一番大事なもの。

老女 えー、指導力も判断力もさっぱりだよ？ (男に) 他になんかある？

男 んー。(女に) ちょっとヒント……。

女 「誠実さ」です！

男 あ、もうそれ答えだね……。

女 結果はさておき、みんなのためによかれと思うことを実行し続けてるんでしょ？ 失敗すればちゃんと認めて謝まる。しどろもどろだろうが、矢面に立って

自分の言葉で語りかける。つまり、責任から逃げてない。誠実そのものじゃない。もう最高。

老女 お飾りのトップだったらそれでも別に構わないよ。誠実だけが売り物で、中身はなんにもなくなたって（ドーナツを食べ始めている男に）ちよっと、コーヒーは？

男 そっかそっか。

老女 あんた好きだよねえ、ドーナツ。

男 好きなんだよー。ドーナツ。

女 ……うん。それいいじゃない。

男 おいしいよー？

女 それでいこう。

老女 どれで？

女 あの美しい笑顔のもとに、とにかく仕事のできる人間を、年齢・性別・身分・経験一切問わずかき集める。王子様にはみんなを安心させることに徹してもらって、あとのことは全部、専門家とか現場の意見とか聞きながら、そのチームが効率的に回していく。

老女 そんなにうまくことが運ぶかねえ。

女 成功させますよ！ このドーナツ作戦を！

男 え、なんて…？

女 みんなが好きなドーナツとおんなじにしちやえってこと。まあくしっさり周りにさえ固まったら、「甘いねえ」「おいしいねえ」って喜ばれるでしょ？ 真ん中が空っぽだって。

老女 ついに「空っぽ」って言い出したね、王子様のことを。

女 よし！ こうしちやいらんない！（作業台から飛び降りると激痛）痛い痛い痛い痛い！

男 車椅子あるよ？ 来館者用の。

女 ……大丈夫。気合でなんとか…。

老女 じゃあせめてこれ履きな。（と近くにあった長靴を履かせる）

女 まずは疫病についての正確なデータと知識よね……。前にも病気流行ったのっていつ頃の話？

老女 ……あたしがまだ、若さと元気にあふれてて、この人より三つ年下だった頃のことだよ。

男 年の差は別に変わらないでしょ、ずっと。

老女 ……。

女 ……ごめんね。一緒に年取れなくさせちゃって。

老女 ……。

男 ……。

女 先輩は、間違えちゃったね……。不老不死が幸せなんかじゃないでしょ？ 心から望んで願うことは、人間もあたしたちとなんにも変わらなかったのに……。本当にすんません。先輩に代わって、ソーリーベリーマツチです。

男 謝罪が軽い……。

老女 ……あんたたちが心から望んで願うことってなによ。

女 会いたい人に会うことでしょうか！ だからさあ行くよ！（足をひきずりながら歩き出し）手始めに、その寺院を建てようとかそそのかしてる奴らを力尽くでも追い払わなきゃ。

男 やっぱり暴力に訴えるんだ？

女 そしてその分の予算は、優先順位を考慮しつつ振り分けし直して……。

老女 もういつそのことあんたが国を治めたらどうよ。

女 考えとくわ。

調餌室を出ていく女の後を追う男と老女。

暗転。

数か月後の同じ場所。

老女が一人でエサづくりの準備をしている。

そこへ疲れた様子の男が入ってくる。

男 毎度どうもお世話様です。いや助かるよ。ちゃんとバイト代出すからね。

老女 おつかれさん。ドーナツあるよ。コーヒーも淹れといた。

男 ああ、うれしいなあ。うちのリーダー、ろくに飯も食わせてくれないんだよ。

「あんた食べなくても死なないでしょ」とか言っつて。ひどくない？

老女 (おやつの準備をしながら) そんな掛け持ちで大丈夫なの？ 来週から水族

館の営業も再開するんでしょ？

男 ぼちぼち本業に専念させてもらおうつもり。委員会の仕事もだいぶ落ち着いてきたからね。

老女 ……今朝の国営放送、見た？

男 ……見てないけど、知ってる……。王子様の電撃結婚。

老女 「お相手は、民間出身の感染症対策委員会委員長」……。

男 ……正確に言えば、出身は「海」だけどね……。

老女 (支度が整い) ……まあ、召し上がれ。

男 ……いただきます。

二人、ドーナツを食べる。

老女 ……うん。甘いね。

男 ……うん。おいしいね。

二人がドーナツをしみじみ味わう中、ゆっくりと明かりが落ちてゆく。